

## 三中版「学びの変革」アクションプラン平成29年展開にむけて

～ 平成28年12月21日 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）から考える ～

平成29年2月

### 1 何のためにするか（子供たちに育てたい姿） p13

- 社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。
- 対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること。
- 変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること。

### 2 教育課程の課題 p15～16

- 教育課程全体としてはなお、各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられており、それぞれ教えるべき内容に関する記述を中心に、教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したものとなっている。そのため、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかは明確ではない。
- 指導の目的が「何を知っているか」にとどまりがちであり、知っていることを活用して「何ができるようになるか」にまで発展していない。
- 重要となるのは、“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うこと

## 3

新しい学習指導要領の6つの改善ポイント p21

- ① 「何ができるようになるか」 (育成を目指す資質・能力)
- ② 「何を学ぶか」 (教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③ 「どのように学ぶか」 (各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」 (子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤ 「何が身に付いたか」 (学習評価の充実)
- ⑥ 「実施するために何が必要か」 (学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

## 4

教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現 p23~25

(「カリキュラム・マネジメント」の三の側面)

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していること。
  - ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
  - ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。  
(全ての教職員で作上げる各学校の特色)
- 「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けては、校長または園長を中心としつつ、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織や経営の見直しを図る必要がある。そのためには、管理職のみならず全ての教職員が「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組む必要がある。
- また、家庭・地域とも子供たちにどのような資質・能力を育むかという目標を共有し、学校内外の多様な教育活動がその目標の実現の観点からどのような役割を果たせるのかという視点を持つことも必要となる。
- (資質・能力の育成を目指した教育課程編成と教科等間のつながり)
- これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が必要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科間のつながりを捉えた学習を進める必要がある。そのため、教科間の内容について、「カリキュラム・マネジメント」を通じて相互の関連付けや横断を図り、必要な教育内容を組織的に配列し、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させるとともに、人材や予算、時間、情報、教育内容といった必要な資源を再配分することが求められている。
- 特に、特別活動や総合的な学習の時間においては、各学校の教育課程の特色に応じた学習内容等を検討していく必要があることから、「カリキュラム・マネジメント」を通じて、子供たちにどのような資質・能力を育むかを明確にし、それを育む上で効果的な学習内容や活動を組み立て、各教科等における学びと関連付けていくことが不可欠である。

5 三中が育成を目指す資質・能力と1の子供たちに育てたい姿及び教科等との関連

	資質・能力	子供たちに育てたい姿	関連する教科等
学力	将来に通用する基礎学力	<u>主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし</u>	各教科等 (各教科・GKタイム・家庭学習)
スキル	課題発見・解決力	<u>問題を発見・解決</u>	各教科等・総合的な学習の時間
	人間関係形成能力	<u>多様な人々と協働したりしていくことができる</u>	各教科等・道徳・特活・総合的な学習の時間・部活動・行事
意欲・態度	チャレンジ精神	<u>人生を切り拓いていく</u>	各教科等・総合的な学習の時間・部活動・行事・コンクール・コンテスト・検定
	忍耐力	<u>試行錯誤</u>	各教科等・全領域
価値観	人としての思いやり	<u>他者への思いやり</u>	各教科等・総合的な学習の時間・部活動・行事

6 「主体的・対話的で深い学び」について

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点 p49～50

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることである。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

【単元開発のポイント】

※ 単元や題材のまとまりの中で、子供たちの学びがこれら三つの視点を満たすものになっているか

(2) 各教科等の特質に応じた学習活動を改善する視点 p50~51

「アクティブ・ラーニング」については、総合的な学習の時間における地域課題の解決や、特別活動における学級生活の諸問題の解決など、地域や他者に対して具体的に働きかけたり、対話したりして身近な問題を解決することを指すものと理解されることも見受けられるが、そうした学びだけを指すものではない。

例えば国語や各教科等における言語活動や、社会科において課題を追究し解決する活動、理科において観察・実験を通じて課題を探究する学習、体育における運動課題を解決する学習、美術における表現や鑑賞の活動など、全ての教科等における学習活動に関わるものであり、これまでも充実が図られてきたこうした学習を、更に改善・充実させていくための視点であることに留意が必要である。

【単元開発のポイント】

※ これまでも重視されてきた各教科等の学習活動が、子供たち一人一人の資質・能力の育成や生涯にわたる学びにつながる、意味のある学びとなるようにしていくことである。そのためには、授業や単元の流れを子供の「主体的・対話的で深い学び」の過程として捉え、子供たちが、習得した概念や思考力等を手段として活用・発揮させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫を促していくことが求められる。あわせて、教科等を超えて授業改善の視点を共有することにより、教育課程全体を通じた質の高い学びを実現していくことも期待される。

(3) 単元等まとまりを見通した学びの実現 p52

【単元開発のポイント】

※ 「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる。

(4) 「深い学び」と「見方・考え方」 p52

「アクティブ・ラーニング」の視点については、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまうといった失敗事例も報告されており、「深い学び」の視点は極めて重要である。「深まり」の鍵となるものとして、全ての教科等で整理されているのが、第5章3.において述べた各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。

「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。

(例) 「理科の見方・考え方」については、「自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること」

(5) 三中における「主体的・対話的で深い学び」の捉え

- 本校が育成すべき共通した6つの資質・能力と教科の資質・能力については、教科の指導に当たっては、教科の資質・能力の育成を優先し、教科の「見方・考え方」を大切にしていく。
- グループ学習やペア学習などの生徒の活動を毎時間取り入れたら「アクティブ・ラーニング」になるという短絡的な解釈はせず、教科の特性に応じての「主体的・対話的で深い学び」を模索していくが、広島県の「学習者基点の能動的で深い学び」に重きを置く。
- 「主体的・対話的で深い学び」は、単元や題材のまとまりの中で効果的な様々な授業形態を組み合わせて、また、そのまとまりだけではなく、全体の流れの中のまとまりとしてどう資質・能力を活用させているかを見取っていく。
- 本校が育成する資質・能力については、その単元のまとまりやそれぞれの授業の中で、各学年の目指す生徒の姿・在り様から設定する。単元のまとまりの中で、すべての資質・能力を設定する必要はない。
- 生徒にとって、将来役立つであろう技法（ブレインストーミングなど）を単元のまとまりに入れる工夫をする。各教科と総合でそれぞれ1回したとすると1年間10回することになる。